日本行動計量学会会報
第8号
1976年1月25日
日本行動計量学会
事務局
東京都文京区本郷7－3－1
東京大学医学部
保健学科疫学教室

# 学際研究と学際偏見

安田三郎

日本の学際研究も既に戦後三〇年の歴史を経過したが、それでも未だ必ずしも常に成功しているとはいえないようだ。どうも日本の学界では、学際コミュニケーションがうまくいかず、それが学際研究の成功をさまたげている。では何故、日本では学際コミュニケーションがうまくいかないのか。

その原因の第一は、何といっても研究者の側の、学際的知識の貧困さに帰せられねばならない。共通の知識と相互理解なしにはコミュニケーションは成立し得ない。日本の大学の、独立性と自己充足性（といえば聞えはいいが、要するにセクショナリズム）の強い学部・学科の中で、われわれが研究者としてのパーソナリティ形成期を過ごさねばならないことは、この意味で大変不幸である。

しかし、第二に私がここで強調したいことは、「学際的偏見」とでも名付けうるものの存在である。学問分野相互の間で、その学問的蓄積の多少や、基礎科学か応用（又は周辺）科学かの差が存在することは、否定すべくもない。それは丁度、西欧人の皮膚が白く東洋人の皮膚が黄色いのが事実であるのと、同様である。しかし、より基礎的な、蓄積のより豊かな分野を研究している人が、有能かつエライのだ、という考えがあるとすれば、それは人種間偏見と同じような、「学際偏見」といわざるを得ない。

そして白人の中の貧困階層に有色人種への偏見が強いのと同様に、学際的偏見もまた、余り有能でない研究者にしばしば見られるのは、当然である。

人間誰しも多かれ少なかれ人種偏見をもっているのと同様、研究者が学際的偏見にとらわれるのも「自然な」現象ではあるけれども、矢張り度が過ぎればハタ迷惑で、学際研究の発展を阻害する。ある著名な社会科学者が「自然科学の人達は文科系の人を馬鹿にするから、一緒の会合には出たくない」と洩らされたのをきいて、私は今更のように考えさせられたことがある。

幸いなことに、人種間偏見における人種とは違い、学際偏見の基礎になっている所属学問分野は、生まれながらに決定されているわけではない。大学において一応、終生の所属分野が決められるわけだけれども、その後の勉強で更に自分の所属分野をふやすことが可能である。

自分の所属集団に対しては偏見は発生しないから、所属分野をふやすことによって学際偏見を減らすことが出来るし、また他人から受ける学際偏見に耐えることが出来る。

われわれの日本行動計量学会は、学際的知識の修得と学際偏見の昇華の場として、大変有効に機能していると思う。欲をいえば、研究発表やパネル・ディスカッションだけでなく、特別講義や研修に類するものもあってよいのではないかと、思ってみたりする。

（日本行動計量学会理事・東大文学部助教授）

## 和文誌原稿募集

和文誌「行動計量学」第四巻一号（本年九月発行）の原稿を募集します。原稿〆切りは、四月中旬です。和文誌への原稿の応募状況は、これまであまり苦しくありませんので、ふるって御応募下さい。応募規定は「行動計量学」表紙裏に掲載されています。

## 第十回月例シンポジウム SMCと共催で開かれる

第十回月例シンポジウムは、安田三郎氏（東大文）をオーガナイザーとして「地域分析における諸問題」というテーマで、十二月十三日（木）に行われた。出席者は、ほぼ一〇〇名で、延々午後六時近くまで熱心な討論が繰り広げられ盛会であった。

なお、今回のシンポジウムは、すでにお知らせしたように、SMCという意味で、本学会にとって有益であると判断し、共催の運びとなった。なお、今後は、必要に応じて、何らかの形で関わりを持っていく予定である。

東京CHAPTER（CHAIRMAN 大河内正陽専修大学教授）より共催の申し入れがあり、十一月の理事会で協議した結果、SMCとの交流は、学際的研究を推進すると

## IEEE System Man and Cybernetics(SMC) Society について

Institute of Electrical and Electronics Engineers（I. E. E. E.）は，会員数は約16万名，毎月数十種の定期刊行物を発行し，アメリカにおいて最も大きな学会の一つである。SMC SocietyはIEEE が下部組織として有している34 のGroup またはSociety のうちの一つである。

IEEEの日本人の会員は約1900名，そのうちSMC Society の会員は約170名である。

SMC Societyの活動はかなり広範にわたっているが，主な分野は次のとおりである。

(a) Cybernetics
Adaptive and Learning, Biocybernetics Foundation of Cybernetics, Pattern Recognition Health Care Delivery, Socio Economics Artificial Intelligence

(b) Man-Machine Systems
Decision, Control, Visual Communication Voice Encoders

(c) System Science : Technology Resources and Environment Energy

SMC Society は毎年1回アメリカにおいて国際会議を開催してきた。開催地とChairman は

1975年　サンフランシスコ（L. S. Coles）
1976年　ワシントン（W. H. Von Alven）
1977年　ミルウオーキー（R. A. Northouse）

である。1978年にSociety としては初めて，アメリカを離れ，日本（東京または京都）において，開催することに決定し，Chairman には渡辺 慧（ハワイ大学教授）が選ばれている。

このようにSMC Societyは，その活動分野において行動計量学会と共通する面も多いので今後シンポジウムの共催とか，国際会議準備などについて，可能な範囲で学会会員多くの方からの援助を期待している。

なお，SMC Societyメンバー以外の方でも国際会議への参加は全く自由である。

（文責　大河内正陽 SMC TOKYO CHAPTER CHAIRMAN）

# 第四回総会の準備進む

第四回総会は東京大学で開催されることが昨年九月の理事会で決定していたが、昨年十二月九日に大会実行準備委員会（委員長、奥野忠一工学部教授）が結成され、初会合を開き、大会を本年、九月二日・三日・四日の三日間にわたって、東大の経済学部を会場として開催することを決めた。

つづいて、本年一月十三日に開かれた会合で、総合の運営方針の大要が定められ、特別講演としては、「食生活における人間行動」「Grouping method for data handling」パネルディッスカッションとしては、「選抜試験における評価」（仮題）共通テーマに「医療診断における分類と決定」「環境条件の測定とその評価」「離散データとそのモデル」が取り上げられる予定である。なお、各会員に対する講演募集の案内は、三月中旬に発送の予定である。

## 会議議事録要旨

◇理事会（十一月十七日）

於　統計数理研究所

出席者　理事　七名

1. 行動計量学シリーズの出版社はサイエンス社（数理科学発行）が引きうける。今後、執筆内容、執筆者の選定を企画委員会で行なう。
2. IEEEのSMC東京CHAPTERより申し入れのあった月例シンポジウム共催については、十二月例会の場合は認める。今後については、実質的協力が得られた場合にのみ共催とする。
3. 来年度総会は、九月二、三日、四日の三日間東大経済学部で行なう。なお、実行委員長を、奥野忠一氏とすることを承認。
4. 欧文誌BEHAVIORMETRIKAの刊行補助費申請の手続きをとる。

◇運営委員会（十一月十日）

於　上智会館

出席者　運営委員　十六名

1. 講習会は来年四月または五月に東京地区と関西地区で開催、東京地区の実質的責任者を安本委員とする。関西地区では、生沢理事が中心となって計画中。
2. SMCからの月例シンポジウム共催申し入れについては、十二月のシンポジウムについては了承、今後におけるSMCとの提携はケイスバイケースで処理するより理事会に申し入れる。
3. 小グループ研究会は現在五グループが発足中。新たに、関西地区に「データ解析研究会」（責任者、生沢雅夫（大阪市立大）三宅一郎（同志社大）を発足させる。

◇運営委員会（一月十二日）

於　学士会館分館

出席者　運営委員　十名

1. 講習会（東京地区）のテーマは「多変量解析」とし、五月から六月の間行なう。
2. 月例シンポジウムの四月、六月のいずれかの会を、SMCがイニシアティブをとる形で開催するようにする。
3. 本学会と関係の深い他学会の総会、シンポジウム等に関する情報を収集する広報委員会設立準備委員会を結成する。（委員、水野欽司・西川泰夫・今井四郎三委員）なお、これまで、事務局が担当していた会報作成も併わせて行なう広報委員会を、運営委員会とは切り離して設立するよう理事会に働きかける。

## 会員数七四〇名突破

本学会も発足以来、すでに満二年を経過し、会員数も順調に延びており、昭和五十一年一月十二日現在正会員六二一名、準会員一三〇名、計七四四名となっている。また、賛助会員数は三十二社となっている。昭和五十年度における、新会員加入数はちょうど一〇〇名、また、新しく加入した賛助会員は、産業図書・住友化学・日本IBMの三社である。

なお、お近くに、本学会の加入を希望する方がいらっしゃいましたら、事務局あて御一報下さい。

## 講習会テーマ決まる

本年五月から六月の間に、東京地区と関西地区において講習会が開催されるが、東京地区のテーマは「多変量解析」と決まった。このテーマは、昭和四十九年度五月に開催されたものと同一であるが、今回は、応用例を豊富に取り入れて、内容をよりわかりやすくするよう計画が練られている。

研究会だより

## 「データ解析と統計数理」研究会

この研究会は隔月開催を目標に研究発表会を続けている。四十九年七月の初会合から現在までに八回行われている。土曜の午後を研究発表二件とその討論にたっぷり使っている。

出席者は十人前後（会員二十人）で毎回密度ある活発な意見がとりかわされている。近くは昨年十一・十二月と二回行われた。十一月はユニバック総研の斉藤堯幸氏がAdditive Constantに関するある種の固有値問題について問題提起をし、統数研の大隅昇氏が地域数値分類法の紹介をした。

十二月は東大の高根芳雄氏による多次元尺度構成の新しい手法Indicator Methodの発表と電総研大津展之氏から行列の特異値分解による図形表現について応用例が示された。方法論に関する発表が多いが、応用例や問題提起等も歓迎する。最近関西に三宅一郎・生沢雅夫両氏を世話人とする「データ解析」研究会が発足した。将来は連絡を緊密にして研究会の共催も計画していこうと考えている。

会員の声

## アメリカ留学雑感

高根芳雄

アメリカに二年程留学（ノースカロライナ大学・サーストン心理測定研究所）して少々英語上達したからというわけでは決してない。というよりはむしろ英語では未だ言葉の持つ微妙な陰影がわからぬせいであろうが、最近つくづく日本語よりも英語の方がはっきりとモノを言える言語のような気がしてならない。はっきりというのは勿論、表現力のうえで英語の方が総体的に優れているという意味ではない。相手の思惑を気にせず遠慮なくという意味である。だから余計な感情が入らず、学問的な議論をするにはうってつけである。

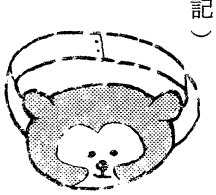
尤も、こうしたことを単に言葉の問題としてのみ取り上げるのは余りに一面的であろう。

アメリカ人が必要なときにはっきりモノを言うことの背後には、深く文化に根ざした彼等一流の徹底した合理主義の精神がデンと腰を据えているように思われるからである。それがいろいろな所にいろいろな形で滲み出ている。よって例えば、大学に於ける電子計算機の使われ方（研究者の便宜を考えて一週七日、一日二十四時間走っている）、大学院に於ける学生の指導体制（研究者として一人立ちするのに必要な最少限の技術指導の重視）徹底した能力主義（研究者は研究だけが勝負といった厳しい学問的風土）等々、数え上げればきりがない。

郷に入っては郷に従えというが、肌で感じて来た研究者としての厳しさだけは今後も忘れたくないものである。（日本行動計量学会会員、東大文学部・心理学研究室）

## 編集後記

大抵、年があらたまると気持がひきしまるとか、これから始まる一年間の抱負のようなものを無意識に考えているというのが人間の一つの習慣行動のようなものになっているかのようです。そこで、日本行動計量学会事務局も新年に際して、この一年間の抱負のようなものを考えてみたのですが。

やっと、このところ、学会設立当時の慌しさにくらべて、落着きをとりもどし、いわば軌道にのってきたような気配なのですが、そうなれば、そうなったで、いささか気がゆるみ、どこかにたるみが出来るのではないかと懸念されます。そんな時こそ、新しく行動計量学的志向をめざしてのびてくる若い芽が、ことの外、重要な役割りを果たすのだと考えられますから、私達はそれら若い芽の発見に精出すことが肝心のように思えます。そのためには、常に変化する時代の風潮の中にあっても、決して変らない本質的に重要なものを見失うことなく、しかも、その時代でなければ、決して成長発展することの出来ないものをたえず育くむ場を作るのも一つの方法かと思います。

今年こそ、どこからか、行動計量学ならではと、ひとしきり感嘆の声がもれてくるような、そして真実の意味における勇気ある魂と英知と頭脳を持った若い人々のたくましい躍動を期待したいものです。（丸山記）